

イグナチオ・デ・ロヨラの神秘思想の 思想的系譜に関する一考察 — 『自叙伝』におけるマンレサの体験を中心に—

松村 康平

1. はじめに

1522-23年の一年足らずの期間、後にイエズス会の創立者となるイグナチオ・デ・ロヨラはスペインのバルセロナにほど近いマンレサに滞在し、隠遁生活を営んだ。彼はこの時期について、その『自叙伝 *Autobiografía*』の中で次のように述べている。「このころ、神は学校で教師が生徒を教えるよう、彼[イグナチオ]を教え導いた。彼がまだ無知で荒削りな才であったためか、またよい師を持たなかったためか、あるいは神に仕えるために神自身が与えた堅固な意志のためであった¹」。ここでは、神が直接的にイグナチオを指導する観点が強調されており、それは後のイグナチオの神秘思想の解釈に影響を与えている²。

イグナチオの神秘思想がキリスト教の思想的伝統においてどのような系譜に位置付けられるのかという問いにはその強調点の違いから、主に二つの立場が見られる。まず、イグナチオ自身の特有の体験に基礎を置く個人的内面的霊性への傾斜とその独創性を強調する立場である³。特に、16世紀の近代における個人の経験・体験の勃興の時代にあって、イグナチオの神秘思想には、それ以前の神学的伝統と比して、彼の主著である『靈操 *Ejercicios Espirituales*』における記述や『自叙伝』、『靈的日記 *Diario Espirituel*』での詳細な内的体験の記録にみられるような、個人的内面的特徴をもつ独創性が指摘されてきた。それらではイグナチオの思想をキリスト教の思想的伝統に位置付けるというより、先の『自叙伝』において述べられるような、神の直接的指導の

下にある彼の個人的体験をその霊性の発露とみて、イエズス会の創立、さらには会の活動を通してカトリック教会の改革へと接続されていくと理解されてきた。

一方で、イグナチオの神秘思想にデヴォチオ・モデルナ *devotio moderna* 等のキリスト教伝統の強い影響を見出し、その連続性の中に彼の霊性を位置付ける立場がある⁴。それらは、とりわけ彼の回心のプロセスにおいて少なからぬキリスト教的諸伝統との接触とその流入とを指摘する。またイグナチオは、当時の神学研究における中心地であったパリ大学で学ぶ中で最初期の同志と出会い、彼らとイエズス会を創立し、さらにはイグナチオの後の世代のイエズス会士たちは、まさにスコラ学の旗手となっていったのである⁵。

上述の二つの立場のうち、どちらの方が妥当であるのかということに関しては、イグナチオの思想的発展に関する資料の複雑さや不足のため、これまで必ずしも十分に議論がなされているとは言えない⁶。前者の立場に傾斜することによって、イグナチオの個人的内面的霊性はキリスト教霊性の諸伝統から独立した体験においてその独創性を発揮したと解するのであれば、実際にそれ以前の諸伝統との影響関係が指摘されている中で、拙速な解釈であるといえよう。また他方で、後者の立場においては、諸研究者はイグナチオの思想的系譜を追う時、その影響関係をイグナチオの『靈操』に代表される著作と他のキリスト教霊性の伝統に関する著作との類似関係と、彼のキリスト教霊性の諸伝統との接触が確認される状況に求め、彼自身の神秘体験それ自体への考察については綿密になされてきたとはいえない。

本稿の目的は、如上の問題意識のもと、イグナチオの神秘体験の記述それ自体を分析することで、彼の体験のうちに内包されるキリスト教霊性の諸伝統の影響関係を示し、先の前者の立場が強調する「体験」のうちにおいてもキリスト教神秘思想の伝統との連続性がみられること明らかにすることにある。そのために本稿では、まず、彼の神秘体験の構成要素であると考えられる「霊的感覚」、「キリストの生涯の観想」、「霊の識別」の三つのキリスト教神秘思想における伝統について取り上げる。次に、イグナチオの『自叙伝』、とりわけマン

レサに滞在していた時期における彼自身の神秘体験の記述を取り上げ、その諸特徴を追い、解釈することによって彼の神秘思想がキリスト教神秘思想の伝統のもとに照らされていることを確認したい。

2. 靈的感覺

本節ではまず、イグナチオの神秘体験において特徴的な感覚に関するあるいは知覚に関する言語表現の影響として、特にキリスト教神秘思想史上の概念として「靈的感覺」に求める。そのために、まず「靈的感覺」の一般的な理解について確認し、次にイグナチオの神秘思想における靈的感覺の解釈、また彼自身の神秘体験の描写における言語用法の特徴を確認したい。

2.1 キリスト教神秘思想の伝統における「靈的感覺」

キリスト教神秘思想における神秘体験の描写での感覺的表現に関しては「靈的感覺 *sensus spirituales*」と呼ばれ、身体的な知覚に関する表現を用いてその神秘体験や「神の實在」、「神の知」に関して叙述するものとして知られている⁷。キリスト教神秘思想の伝統において、「靈的感覺」については多くの神秘家や叙述家によって言及されてきた。例えば、最初にこの語の用例がみられるのはギリシャ教父であるオリゲネスであり、その後ニュッサのグレゴリオス、擬ディオニシオス・アレオパギテース、フォティケーのディアドコス、あるいは西方においてもアウグスティヌスやボナヴェントゥラなどその用例には枚挙にいとまがない。

「靈的感覺」の表現は、五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚）に関連する語が、「*spiritus*」、「心 *cor*」、「精神 *mens*」、「知性 *intellectus*」、「内的 *interior*」といった語と合わせて用いられ、通常の五感とは異なる感覺であることが示され記述される。「靈的感覺」をめぐる表現の解釈については諸研究者によって議論がなされてきた⁸。K. Rahner は、この「靈的感覺」が身体的な五感に関するアナロジー

的表現であると指摘している⁹。たとえば、「見る」という表現が、「想像する」や「内省する」、あるいは「理解する」のような通常の内的行為を示すように、何がしかの特別な知覚の容態を示すのではないとするのである¹⁰。

その中でもとりわけヴィジョンと呼ばれる体験がある。神秘体験において用いられるヴィジョンの用例には、大きく分けて「知的ヴィジョン intellectual vision」、*「想像的ヴィジョン imaginative vision」*の二つの種類が認められると指摘する¹¹。「知的ヴィジョン」は直観的に知識を、外的感覚や想像力を介さず¹²に得ることを示す。一方で、「想像的ヴィジョン」は体験が身体的な感覚器官を介してではないが、内的な感覚能力として理解される。

以上のように「霊的感覚」とはキリスト教神秘思想の源流にあり、さらには、身体的感覚器官における感覚能力を超えた、感覚として理解される。これはイグナチオにおいてはどのように展開しているのか。以下においてみてみたい。

2.2 イグナチオの神秘思想における霊的感覚の位置

イグナチオ・デ・ロヨラにおいても、その思想における「霊的感覚」の重要性が指摘されてきた¹²。特にイグナチオが死去した直後から、イグナチオの秘書であったファン・デ・ポランコは『*霊操*』に関する注釈書である『*指導書*』の中で、ボナヴェントウラの『*魂の神への道程*』第4章における「霊的感覚」についての記述に依拠しつつ、『*霊操*』第二週に位置付けられる黙想方法である「*五感の適応*」(一二一番～一二六番)を「*霊的感覚*」の問題として取り上げた。

イグナチオは『*霊操*』において「*五感の適応*」に関して次のように指示している。「準備の祈りと前備の後に、次のような方法で、第一、第二観想に想像の五感を働かせることは有益である」と指示された上で、次のように第一要点から第四要点まで、視覚、聴覚、臭覚と味覚、そして触覚と指示が続く。「想像豊かな目をもって、登場人物を見る¹³」、「彼らが語りまたは語るであろうことに耳を傾ける¹⁴」、「想像する対象の特質に応じて、異なった霊的嗅覚や霊的味覚を働かせる¹⁵」、「触覚をもって触れること¹⁶」。このように、人間の内的

能力である想像力による五感を用いて黙想を行うわけである。J・マレシャル、H・ラーナー、H・U・バルタザールなどなどの後代の諸解釈者はポランコの記述に従いつつ、イグナチオにおける「霊的感覚」の問題系をこの「五感の適応」と関連づけて解釈してきた¹⁷。

一方で、T. W. オブライアンは想像力を用いた「五感の適応」のみがイグナチオの「霊的感覚」の議論の対象となるのではなく、むしろ『霊操』における「霊の識別」(番)の技法とそれを用いた彼自身の神秘体験もまた「霊的感覚」の問題系と関連するものとして提示し、彼自身の『自叙伝』と『霊的日記』における神秘体験の記述を比較し、若干の考察を与えた上で神秘体験における「感じる」、「見る」、「聴く」とあらわされる「霊的感覚」が神による指示を意味し、また神についての理解の基礎づけとなっていると結論づけている¹⁸。

イグナチオの叙述の中でも神秘体験に関する描写において用いられる語としては圧倒的に視覚に関連するものが多い。田辺董は『霊的日記』における知覚に関する表現の用例を点検している¹⁹。それによれば、「『見る ver』は『日記』の中でも最も頻繁に用いられている表現の一つ」として指摘している²⁰。彼は、とりわけ「目 ojos」、あるいは「内的目」や「知性の目」などの言葉を用いて、内的視覚について触れている。他の感覚については、その使用頻度の差からもあまり重要なものとしては捉えられてはいない。この「目」はどのような体験を意味するのか。彼の神秘体験の中でも重要視される視覚的体験、特に「目」に関する彼の特徴的な表現に関して、本稿では第四節において詳しく触れたい。

3. 『霊操』と「キリストの生涯の観想」の思想的源泉

イグナチオの思想の中でも聖書、あるいは「キリストの生涯の観想」は重要な部分を占める。本節では、特にイグナチオの「イエス・キリスト」の理解について確認するために、まず彼の主著である『霊操』の構成とイエス・キリストの位置付けについて触れる。次に、その中でも重要な部分を構成する「キリストの生涯の観想」の思想的源泉としてガルシア・デ・シスネロスの『霊

的生活の修行 *Exercitatorio de la vida spiritual*』, トマス・ア・ケンピスの『キリストに倣いて *De Imitatione Christi*』, ザクセンのルドルフの『キリストの生涯 *Vita Christi*』, の三つの著作について触れ, その影響関係について考察したい。

3.1 『靈操』の構成とイエス・キリストの位置付け

イグナチオの聖書理解の特徴について、川中仁は聖書それ自体が、対話的なコミュニケーション・パートナーとしての神との出会いと交わりの場として理解されていることにあるとし、その特徴は彼自身が著した『靈操』の構造にあらわされていると指摘する²¹。『靈操』は黙想指導書であり、これに基づいて通常「準備」, 本体（「要点」）, 「対話」から成る1時間の黙想・観想を1日5回, それを4週間続け, およそ30日間に渡って行う²²。この4週間は, 第1週「罪の考察と観想」, 第2週「枝の主日までのキリストの生涯」, 第3週「キリストの受難」, 第4週「キリストの復活」とそれぞれの週にテーマが設定されている。また, その前に黙想指導者のための「総註」, 4週間全体を基調付ける「原理と基礎」, さらに第4週の後に指示のために「愛を得るための観想」, 4週それぞれにおいて読むべき福音書箇所を指示する「主キリストの生涯の神秘的出来事」, そして「諸規定」が付され, 全体として構造化されている。キリストの生涯・受難・復活とが『靈操』本体の第2週から第4週までの主要部分を占めていることからわかるように, 靈操者はこの4週間のプロセスにおいて, 指導者との対話を行い, とりわけ福音書におけるイエス・キリストの生涯を辿りつつ, 黙想を進めていくのである。

その中でも, とりわけイエス・キリストへの理解が表されているものとして, 『靈操』第2週に置かれる「謙遜の三段階」について触れたい²³。ここでは, イグナチオが靈操者に求める「謙遜」の内容とイメージが三つの段階に区分されている。ここではとりわけ第1段階と第2段階を取り上げる。第1段階の謙遜は「すべてにおいて私たちの主なる神の掟に従うことができるように, できる限り身を低くし, 自分を遜ること²⁴」である。ここでは空間的なモチーフ

が効果的に用いられ、「身を低く」と下降の動きが示される。また、第3段階の謙遜は「もっとも完全な謙遜であり、……もし偉大なる神の賛美と栄光となるならば、わが私たちの主キリストにいつそう倣い、似た者になるために、貧しいキリストと共に富よりも貧しさを、侮辱されたキリストと共に名誉よりも侮辱を望み、この世の知恵ある者や賢い者と思われることを望むよりも、愚か者と思われたキリストのために、愚か者と思われることを望む²⁵」。霊操者はキリストの下降の動き、すなわち世界の中に入り、彼の「貧しさ」、「侮辱」、「愚か者」とみなされること分かち合い、キリストと似たものになることが目指される²⁶。霊操者は福音書の読解を通して「キリストの生涯」を辿りつつ、キリストの「謙遜」を身に帯び、キリストと共に下降し、「選定」において神の意志へと一致していくプロセスへと入っていくのである。

3.2 「キリストの生涯の観想」への思想的影響

この「キリストの生涯」を辿るプロセスにはいくつかの思想的源泉があると指摘されている²⁷。本稿では『霊操』の詳細な成立史について触れる余裕はないが、主たる影響要素としてガルシア・デ・シスネロスの『霊的生活の修行』、トマス・ア・ケンピスの『キリストに倣いて』ザクセンのルドルフの『キリストの生涯』、の三つに触れたい。

トマス・ア・ケンピスの『キリストに倣いて』は、イグナチオにとって最も継続的に読まれた霊的著作の一つである。おそらくイグナチオはマンレサ滞在の頃から本書を読み始めたと考えられており²⁸、実際『霊操』においても霊操中に霊操者が本書を読むことを奨励されている²⁹。この書の冒頭には次のようにある。「キリストの教えは聖人たちの教えに勝る。その教えの精神を汲み取ることができるものは、そこに『隠れたマンナ』を見出すであろう。ところが、多くの人は、しばしば福音のみことばを聞いていても、それほど、心に響かない。それは、キリストの精神から遠ざかっているからである。キリストのみ言葉を十分に理解して、それを味わおうとする人は、自分の全生涯をキリストに

一致させるように努めなければならない³⁰。このように、『キリストに倣いて』もまた、福音書の読解とキリストの生涯への回帰を喚起している。

イグナチオは 1522 年に、モンセラットにとどまり、ベンディクト会士ジャン・シャノンとの交流を続けていた³¹。いたという。その際に、モンセラットのベネディクト会修道院院長ガルシア・デ・シスネロスの著作に触れたと考えられている。『靈的生活の修行』は、デヴォチオ・モデルナの靈性家たちや、教父、ボナヴェントウラ、また、前述のザクセンのルドルフやトマス・ア・ケンピスの著述から影響を受け、それらを浄化・照明・合一とういう三段階に区分し、編纂した靈的詞華集であり、イグナチオの『靈操』への思想的影響が指摘されている³²。他方で「キリストの人間性」という観点からは、同著者の『コンペンディオ *Compendio*』の影響も大きいと考えられる。『コンペンディオ』は二部に大別され、第一部はキリストの生涯についての観想を含み、第二部は、典礼暦に沿いつつ修道生活に合わせた黙想方法が指示されている。この中にはすでに『靈操』における読むべき福音書箇所を指示する「われわれの主キリストの生涯の神秘的出来事」と類似する聖書読解の要点が整理されている。

最後に、カルトゥジア会士ザクセンのルドルフによる『キリストの生涯』の読書体験はイグナチオに「キリストの生涯の観想」へと招いた³³。イグナチオはその回心体験の際に『キリストの生涯』を読んでいた。本書の基本的性格は聖書読書への招きである³⁴。『キリストの生涯』は、二部に分かれ、第一部は、「御言葉の誕生」やイエスの諸々の奇跡などの言行録など、いわゆる公生活を含んでいる。第二部は、「イエスの変容」や「善きサマリア人」の説話などを含みつつも、その中心点はイエス・キリストの受難と復活である。本書はキリスト教の伝統に基づきつつ³⁵、①聖書の精読によるキリストの救済、②イエスを知り、愛し、仕える、③イエスとの愛の神秘的一致、④イエスに従い、生きて死ぬ自己決断の恩恵を求めることを目的としている³⁶。これらのモチーフと方法論とはイグナチオの『靈操』に引き継がれている。したがって、本書は、聖書とりわけ福音書への入門書として機能しており、イグナチオもこの伝統に従い、聖書を読み、その経験は『靈操』の作成において発揮されている。

以上のような「キリストの生涯の観想」の中心は受肉の神秘に根を持つキリストの人間性への信心にある³⁷。それは、キリストはその人間性を通して世界へと入り、またその復活を通して世界を変容させることへと向けられている³⁸。したがって、「キリストの生涯の観想」には、世界への志向と変容とが含蓄されているわけである。

4. 霊の識別

本節では「霊の識別」に関して概観し、次にイグナチオの『霊操』における記述からみてみたい³⁹。「霊の識別」は、まず聖書の記述、とりわけ「コリントの信徒への第一の手紙」12章10節の中で触れる「霊を見分ける力」、あるいは「ヨハネの第一の手紙」4章1節における「愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい」などの言葉に由来している。「霊の識別」は、初代教会や教父たち、とりわけオリゲネスにおいて主題化されはじめ、砂漠の師父やヌルシアのベネディクトゥスなどの修道霊性において発展された。中世においては、ドミニコ会の伝統、特にトマス・アクィナスやエックハルト、タウラーなどにおいて重要視された。

イグナチオは上述の伝統の中において紡がれた「霊の識別」の技法を体系的に示した。「霊の識別」に関しては、先に言及したザクセンのルドルフの『キリストの生涯』においても言及されており、後述するようにイグナチオはそれを読んでいたのであろうことは、彼のキリスト教伝統との接続に関して考える際に注目すべきことであろう⁴⁰。

イグナチオは『霊操』において、人間が神の意志をどのように感じ、また、見分けることができるのか、その認識方法と識別方法を示している⁴¹。彼は人間の内的生活において、内的な霊の「動き *moción*」に注目している。すなわち人間の感情（例えば「考え」、「思い」、「望み」など）を「動き」として捉え、その由来、すなわち、それが神に由来するものなのか、悪に由来するものであるのか、あるいは何に向かうものであるのかを点検し、その原因を識別す

る⁴².

イグナチオは『靈操』313番において次のように記している。「靈魂の内に起こる様々な動きを何らかの仕方を感じ、自覚するための規則、すなわち善い動きは受け入れ、悪い動きは捨て去る⁴³」。「靈の識別」は、靈操者の内に働く「動き」を点検しながら、神に由来する「善い動き」を「受け入れ」選びながら、それに自らの意志を合わせ、神の意志と一致していく道へと入っていく⁴⁴。

この靈の「動き」は、「慰め *consolación*」と「荒み *desolación*」と名付けられる感覚によって示される。「慰め」は、「魂の内に何らかの内的動きが起こり、それによって、魂は創造主の愛に燃え立ち、いかなる被造物もそれ自体では愛せず、創造主においてのみ愛することができるようになる⁴⁵」状態であり、「荒み」は、慰めとは正反対の状態とされ、「魂の闇、混乱、卑しく地上的なものへの動き、様々な動揺や誘惑による不安や、希望も、愛もなく、不信へ動かし、すべて億劫で熱い想いのない、喜びなく、創造主から全く隔たっている⁴⁶」状態をいう。『靈操』においてはこの基準を用いて、自らのうちにある「動き」を識別し、神の意志を見出し、神に従うことが目指されるわけである⁴⁷。

5. 『自叙伝』における神秘体験とその性格

イグナチオ・デ・ロヨラの『自叙伝』には、多くの箇所では彼の神秘体験が視覚的に描写され、記録されている。『自叙伝』は、彼が晩年、自らの半生、とりわけ自身の回心からイエズス会の創立までの出来事を、ルイス・ゴンサルヴェス・ダ・カマラに語り、それをカマラが口述筆記の形で記録したものである。これには、イグナチオ自身の外的・内的変化が記録され、いくつもの神秘体験に関する記述が含まれている。以下においてわれわれは、それらの記述の中から、彼の回心の体験と、またマンレサ滞在期間中に得た神秘体験について取り上げ、考察したい。その際に、先に確認した「靈的感覚」、「キリストの生涯の観想」、「靈の識別」のそれぞれの伝統と、特徴的な視覚的表現とに注目し、それらがどのように彼の神秘体験において展開されているのかを点検したい。

5.1 回心の体験

イグナチオはスペイン・バスク地方にあるロヨラの貴族であった。彼は騎士になることを目指していたが、1521年、パンプローナの戦いで右足に砲弾を受け、騎士への夢を諦めざるおえなくなった。彼は怪我の療養中に二冊の書物を手にとって読んだ。その一つはヤコブ・デ・ボラギネの『聖人の華（＝黄金伝説 *Legenda aurea*）』のスペイン語訳版であり、もう一つは先述したザクセンのルドルフの『キリストの生涯』であった。彼はそれらを読みつつ、その内容に惹かれ、「慰め」と「荒み」という内的な動きに気づき始めた⁴⁸。この変化はいわゆる世俗的な事柄への疑義とキリスト教的生活様式への憧れという形で現れてきた⁴⁹。彼は、この変化について次のように記している。

しかし、目が少し開かれ始める日まで、はじめ彼はそれを見ることも、立ち止まってその違いを熟考することもなかった。しかし、その多様性に驚き始め、それを内省するようになった。そして体験から、ある考えから自分が憂鬱にされ、ある考えから快くされることに気づいた。そして、少しずつ、悪霊と神の霊の差異を知るにいたった⁵⁰。

ここでは「悪霊と神の霊の差異を識別」と、先に見た『霊操』の中心的方法論の一つとなる「霊の識別」が体験的に練り上げられている様が見て取れる。この内的な「差異」⁵¹を見るものとして、イグナチオは「目 *ojos*」と視覚的な表現で描写している。この視覚的な表現は彼の体験における視覚的なイメージの描写へと関連していく。回心から程なくして、彼は次のように聖母子のイメージをめぐる神秘体験を得ている。「ある夜、目覚めていたとき、幼児イエスを抱いたわれわれの貴婦人〔聖母マリア〕のイメージ *imagen* をはっきりと見た。このヴィジョン *vista* とともにかなり長い間、非常に強烈な慰めを受けた。それと同時に、過去の生活全体、特に、肉欲に関する事柄に関して強度の嫌悪を

覚えた⁵²。彼は、聖母マリアと御子イエスの「イメージ imagen」ないしは「ヴィジョン vista」を見たと言言し、それと同時にこのヴィジョンは「肉欲」の否定を彼に喚起した。ここでは、イメージあるいはヴィジョンは、それに伴って、彼に何かしらの意味や内容を与えるものとして機能している⁵³。この体験から『自叙伝』においては、次第に視覚的表現が豊かになっていく。

イグナチオは、マンレサに入る前においては自身が「十分に目を得ていなかった...⁵⁴」と視覚的な表現「目」を用いつつ、回心後においても神秘体験に対応する「目」をまだ獲得していなかったことが強調されている。この彼の十分ではない「目」は、マンレサに入りすぐに不可解なヴィジョンを見る経験を得た。そのことは次のように書かれている。

...晴れた日、自分の近くの空中で一つの珍しいものをみるものがしばしばおこった。そのものは異常なほど美しかったので、かれに深い慰めを与えた。それが何であるか、その本性を判断することはできなかったが、蛇の形をしているように、また実際は違うが、目のように輝くたくさんのものをもっているように思われた⁵⁵。

ここでは、「目のように輝くたくさんのもの」をもつ「蛇の形をしている」ものを見る体験について言及されている。それが実際どのような意味を持つものであるかは、本稿においてマンレサでの神秘体験についてみた後に、再度触れるが、この体験の表現における特徴について若干の考察を加えたい。ここで注目したいのは、イグナチオがこの対象について「美しかった」、「深い慰め consolacion を与えた」と評価していることである。これらの表現から、この蛇の形のものが「霊の識別」の対象となっていることがわかる。このようにマンレサにおける以下の体験は「霊の識別」に開かれていることが理解できる。

5.2 マンレサでの体験

『自叙伝』に描かれる、彼の神秘体験における視覚的表現は、特にマンレサでの体験に集中している。回心を経て、イグナチオはキリスト教的な生活様式に惹かれエルサレムに行くことを思い立ち、出発した。そして、その途上にある町マンレサで約一年間、隠修士的生活の中で修行生活を行なっている。その期間に彼は、たびたび神秘体験を得、それらは『自叙伝』に記録されている。以下においてこれらの体験を取り扱うとともに、「見た ver」, 「知性 entendimiento」, 「目 ojos」の表現に注目して、彼の記述を点検する。

第一の体験について、彼は次のように三位一体に関わる神秘体験を記述している。「ある日、修道院の階段で私たちの貴婦人〔聖母マリア〕に祈っていると、三つの鍵盤のかたちのうちに聖なる三位一体を見ているように、知性が高められ始めた⁵⁶」。ここでは「知性 entendimiento」が「高められ」、「三位一体」を「三つの鍵盤」、のうちに「見ているよう como que vía」であったという。ここではただ〈見た〉といわれているのではなく、「のよう como」とむしろ、「三位一体」と「三つの鍵盤」とのイメージの連関が示唆されている。

「知性」はイグナチオの神秘体験において特徴的に用いられる語であり⁵⁷。「知性」はイグナチオの著作においても、『靈操』においては19回用いられている。『靈操』内での言語用法について若干触れれば、「知性」はその働きとして「検討すること discurrir」⁵⁸、あるいは「神の意志」を選ぶという判断に関わり、いわば神からの働きに応えるという働きをもっているとされる⁵⁹。

第二の体験については、次のように創造論に関して記述されている。「あるとき、大きな霊的よろこびとともに、彼の知性のうちに、神が世界を創造したところを顕した。一つの輝くものが見え、そこから幾多の光線が発出し、神が輝くものから光を造られたように思われた⁶⁰」。ここでは「知性」に「顕した representó」と、直接的に「見る ver」などの動詞で彼の視覚的体験が語られるのではなく、むしろある種の象徴的な顕現として語られている。また、「一つの輝くもの」と「幾多の光線」というイメージが語られ、「創世記」冒頭にお

ける「光あれ」の句に対する理解が表明されていると考えられる。

第三の体験については、彼がミサに与った際に得た「聖体」に関わる体験について詳述している。

この村に滞在していたある日、いつもの修道院の教会のなかでミサにあずかり、主の聖体が奉挙されたとき、彼は白い光線が上から来るのを内的な目を見た。そして、何年も経ってから後にも、それをよく説明することはできないが、彼が知性で明らかに見たことは、あの聖なる秘跡のうちに、私たちの主イエス・キリストが現存しているのを見たということであった⁶¹。

ここでは、ミサの中で「聖体」が奉挙される瞬間について詳述している。とりわけ「白い光線 blanca」と色が示されているが、色に関する表現はイグナチオの著作の中でたびたび言及され、「白」は特にイエス・キリストに関連して語られる⁶²。また、「上から de arriba」と位置的な関係性が示されているのは興味深い⁶³。さらに、「内的な目」が「知性」と言い換えられ、この体験が「主イエス・キリストが聖体の中に現存している」というキリスト教的理解へと彼を導いていることが強調されている。

第四の体験については「キリストの人間性」をめぐって次のように記述されている。

祈りの間、長い時間、内的目でキリストの人間性を見た。その姿は白い身体のように、大きくも、小さくもなく、四肢の区別は決して見えなかった。マンレサではこれを幾度も見た。……彼が見たこれらは、確信を与え、その後信仰の確信を与え続けた。「もし、信仰のことごとを教える聖書がなかったとしても、自分が見たことごとのために、死ぬ覚悟だ」と考えるほどだった⁶⁴。

ここでイグナチオは「キリストの人間性」の描写は「白い身体」あるいは「四肢の区別は決して見えなかった」とあるように明瞭には描かれていない。そのイメージは明瞭ではないが、「もし、信仰のことごとを教える聖書がなかったとしても、自分が見たことごとのために、死ぬ覚悟だ」と、体験と信仰とを直接的に接続する表現によって、彼の得た信仰の強い「確信」をあらわされている。この「確信」に関して、川中仁は「キリストの姿」とのコミュニケーションにおける「言語」の役割を果たしていると指摘している⁶⁵。すなわち、「霊の識別」をする中で、「キリストの人間性の観想」を通してイグナチオ自身が「確信」を得るプロセスは一種のコミュニケーションであるというわけである。先述したように、「キリストの人間性」はイグナチオの思想において中心的な主題である。特にそれはイエス・キリストが受肉において世界へと入り、それに参与することによってイグナチオ自身がイエス・キリストとの一致へと向かう経路となっている。したがって、この体験においてイグナチオは、「確信」を通じたコミュニケーションにおいてイエス・キリストとの関係が深められると同時に、イエス・キリストとともに世界へと入り、さらに彼自身が変容へと開かれていくということが示唆されているといえよう。

さらに第五の体験として、イグナチオはマンレサの中心から少し離れたところにあるカルドネル川を歩いている時に得た体験を次のように語っている。

信心深く、歩きながら、川に顔を向けて座った。……そこに座っているうちに、知性の目が開かれ始めた。何かヴィジョンを見たわけではなく、多くの事を理解し、知った。多くの事というのは、霊的な事、信仰と学問に関する事も含んでいた。彼にとって、すべてのことが全く新しいこととなってあらわれるほど大いなる照らしの体験だった⁶⁶。

このカルドネル川での体験では、「知性の目が開かれ始めた」と視覚に関わる表現がみられるが、それまでに見られた、対象を見て、理解を得るという構図は取らない。むしろ、「何かヴィジョンを見たわけではなく」とそれが「見た」

体験ではないことが強調され、「霊的事柄」,「信仰」,「学問」を「理解し」,「知った」とこの体験の知的側面の強さが強調されている⁶⁷。しかし、ここで重要なのはこの体験がイグナチオに「すべてのことが全く新しいこととなってあらわれる」「照らしの体験」であったことだ。ナダルの証言をはじめ、諸研究者はこの体験が「霊の識別」に関係していると指摘している⁶⁸。特に、原文の欄外には「あたかも別の人間となり、前に持っていたものとは別の知性を持つ者となったとわかるほどにほど強く照らされた知性を持つようになった⁶⁹」と注釈され、それが識別の能力の根本的な変容を示すと指摘されるのである⁷⁰。

『自叙伝』において、カルドネルの体験の記述の直後に、この識別能力の変容が彼に具体的な「霊の識別」の深化をもたらしていることが例示されている。

この照らしがしばし続いた後、そこから程なく行ったところにあった十字架に跪き感謝を捧げるため祈った。その場所で、度々現れても、その正体を認識できなかつたあのヴィジョン、以前述べた、とても美しく、多くの目を持ったものがあらわれた。しかし、十字架の前に立っていると、美しい色ではないことがわかり、それが悪魔であるということ、とても明らかに知り、意志もそれを認めた⁷¹。

ここでは以前理解できなかつた「多くの目をもった〔蛇〕のようなもの」が改めて取り上げられ、「悪魔」として識別され、理解されている。その際には「十字架」が識別の基準として働き、それまでとは異なる「霊の識別」の体験が描写され、変化ないしは深化している様が認められる⁷²。この後、『自叙伝』の記述は程なくしてマンレサから離れていく。

回心の体験以降、マンレサでの滞在中イグナチオの体験の視覚的表現は豊かになっている。これら視覚的表現を点検すると、以下の三つの特徴が指摘できる。第一に、「〔知性の・内的〕目」の働きは、「霊の識別」に関わる。回心において開かれ始めた「目」は、その後、彼の「霊の識別」の認識の経路として働く。第二に、「〔知性の・内的〕目」はキリスト教の教義や知識のみでなく、

イメージを捉え、それは神との関係性や体験の状態をあらわし、意味や理解、確信をもたらす。第三に、「[知性の・内的]目」の成長ないしは変容である。マンレサを訪れた当初において、彼の「[知性の・内的]目」は「多くの目をもった〔蛇〕のようなもの」を理解することができなかった。しかし、マンレサでの記述の終盤においては、それが「悪魔」であると理解される「[知性の・内的]目」を持つようになったのであった。

6. 結語

本稿においてわれわれは、イグナチオの神秘体験に見られるキリスト教的伝統の影響を明らかにするために、彼の神秘体験の構成要素であると考えられる「霊的感覚」、「キリストの生涯の観想」、「霊の識別」の三つのキリスト教神秘思想における伝統的概念について取り上げ確認した。それらの要素は『自叙伝』におけるイグナチオの神秘体験の記述を点検する中で、随所に確認された。とりわけ、彼の回心の体験からマンレサでの五つの神秘体験を、視覚的表現を中心に点検すると、彼は回心において次第にその「[知性の・内的]目」が開かれ、「霊の識別」の体験が開始された。それらは「霊的感覚」に類する視覚的表現によって表され、マンレサでの五つの体験の要素には「キリストの人間性の観想」などの要素がみられ、それらを通してさらに彼の「[知性の・内的]目」は変容されたのだった。

以上のようにイグナチオの神秘体験においては、確かに彼の諸著作においてあらわされているように個人的内面的霊性とその表現がみられる。しかし、それら体験の実相はキリスト教神秘思想の諸伝統から離れるものではなく、むしろそれらに深く依拠し、それら伝統の個人的体験における展開であるとみることができよう。イグナチオをはじめ、イエズス会士たちはキリスト教霊性の結晶たる『霊操』を携え、近代キリスト教思想の旗手となっていったのだった。

註

1 『自叙伝』27番。□内筆者付記。なお原文に関しては、Ignacio de Loyola, *Autobiografía, Obras Completas de San Ignacio de Loyola* (BAC 86), Madrid, 1963. を用い、和訳に関しては『ある巡礼者の物語』（門脇佳吉訳、岩波書店、2000年）を参考として用いる。『自叙伝』においてイグナチオが自身の事柄を語る際には「彼」と三人称単数で語っていることには留意したい。またこの句の解釈に関しては、川中仁「『マンレサ』（一五二二-二三）：イグナチオ・デ・ロヨラの生涯における三一的キリスト中心的コミュニケーション（1）」『人間学紀要』上智人間学会編、2006年、173-174頁参照。『自叙伝』ではこの記述の後、彼の五つの特徴的な神秘体験について詳述されている。これらの体験については本稿第4節において触れる。

2 L・コニエ『キリスト教神秘思想史 近代の靈性』第3巻、上智大学中世思想研究所監訳、1998年、平凡社、16頁参照。コニエはイグナチオの内的体験に関して「独学者」と評し、彼が实际的に他から靈的指導を受けていないことを強調している。

3 Cf., H. Coathalem, *Commentaire du livre des Exercices*, Desclée de Brouwer, Paris, 1965, pp. 25-27; H. Rahner, S.J., “Be prudent money-changers”: toward the history of Ignatius’ teaching on the discernment of spirits, *Ignatius of Loyola: His Personality and Spiritual Heritage 1556-1956*, F. Wulf, S. J., ed, 1977, p. 272. H. コアタレムは、イグナチオの神秘思想、とりわけ『靈操』が、それ以前のキリスト教の伝統との類似性を含むことを認めつつも、「独創的な構造であり、全く新しい」と指摘している。H. ラーナーもまた同様に、イグナチオの神秘思想の源泉として、伝統的靈性というよりも彼自身の個人的な体験に求めている。また、イグナチオの体験に見られる独創性に関して、渡辺優は彼の神秘思想における「個人的内的靈性への傾き」や「伝統的信仰と個人的経験の分離」といった性格を指摘している（『ジャン＝ジョセフ・スーラン 一七世紀フランス神秘主義の光芒』慶應義塾大学出版会、2016年、98-99頁参照）。なお、『自叙伝』や『靈的日記』にみられるイグナチオ自身の内的体験の諸相については、田辺蓮『ロヨラのイグナチオの神秘体験』（南窓社、1986年）を参照。

4 Cf., J. W. O’Malley, S. J., How the First Jesuits Became Involved in Education, *The Jesuit*

Ratio Studiorum: 400th Anniversary Perspectives, V. J. Duminuco, S. J., ed., New York: Fordham University Press, 2000, pp. 60-61, J. W. オマリーは内面的靈性は当時のキリスト教靈性における一つの思潮であったと指摘している。また、須沢かおりはデヴォチオ・モデルナの系譜にあるザクセンのルドルフのイグナチオへの強い影響を指摘している（「ザクセンのルドルフスの靈性とその近代への影響」『中世と近世のあいだ 14世紀におけるスコラ学と神秘思想』知泉書館, 2007年, 190-193頁参照）。また桑原直己はイグナチオがパリ大学在学中居住していたモンテーギュ学寮における教育を通じたデヴォチオ・モデルナからの影響を指摘している（「G・フローテとその後継者たち—devotio modernaの靈性史—」『倫理学』第29号, 筑波大学倫理学研究会編, 2013年; 『キリシタン時代とイエズス会教育 アレッサンドロ・ヴァリニャーノの旅路』知泉書館, 2017年, 23-28頁, 参照）。

5 Cf., G. Codina, S. J., The “Modus Parisiensis”, *The Jesuit Ratio Studiorum: 400th Anniversary Perspectives*, V. J. Duminuco, S. J., ed., New York: Fordham University Press, 2000, pp. 28-55. イエズス会の主な事業であった学校における教育活動もパリ大学における習学方法である「パリ方式」を採用し、トマス・アキナスを中心としたスコラ学を学校における学生の学習課程に、またさらにはイエズス会員の養成課程に本格的に取り入れた。

6 L・コニエ, 前掲, 19頁参照。

7 Cf., M. Viller, ed, *Dictionnaire de spiritualité ascétique et mystique : doctrine et histoire*, Tome 14, Paris, 1937, pp. 598-617.

8 Cf., Sarah Coakley & Paul Gavrilyuk, *The spiritual senses: Perceiving God in western Christianity*, Cambridge: Cambridge University Press, 2011, pp. 1-19.

9 Cf., K. Rahner, *Le début d'une doctrine des cinq sens spirituels chez Origène*, RAM, 13, 1932, p.114.

10 Cf., *Ibid.*, p. 6. しかし、すべてがラーナーの語る形態であるとは言い切れない。高度な観想における身体性と内面性との統合として語られる場合もあるとされる。

11 Cf., M., Downey ed., *The New Dictionary of Catholic Spirituality*, Michael Glazier, 1993, p. 1008.

- 12 イグナチオの靈的感觉に関する研究史に関しては、T. W. O'Brien, *Con Ojos Interiores Ignatius of Loyola and the Spiritual Senses*, *Studies in Spirituality* 26, 2016, pp. 263-281.
- 13 『靈操』122番。原文に関しては、Ignacio de Loyola, *Ejercicios Espirituales*, *Obras Completas de San Ignacio de Loyola* (BAC 86), Madrid, 1963. を用い、和訳に関しては『靈操』（門脇佳吉訳、岩波書店、1995年）及び、『靈操 改訂版』（ホセ・ミゲル・バラ訳、新世社、1992年）を参考とする。
- 14 『靈操』123番.
- 15 『靈操』124番.
- 16 『靈操』125番.
- 17 Cf., op. cit., T. W. O'Brien, pp. 266-268.
- 18 Cf., Ibid., pp. 279-281.
- 19 田辺, 前掲, 37-39頁参照.
- 20 Ibid.
- 21 川中仁「ヨハネ福音書とイグナチオ・デ・ロヨラの靈操」『さまざまに読むヨハネ福音書』上智大学キリスト教文化研究所編, リトン, 2011年, 18-22頁参照.
- 22 同上, 10-13頁参照.
- 23 この点について詳しくは、拙稿「イグナチオ・デ・ロヨラの神化思想」『テオーシス 東方・西方教会における人間神化思想の伝統』田島照久 / 阿部善彦編, 教友社, 2018年, 479-480頁参照.
- 24 『靈操』165番.
- 25 『靈操』167番.
- 26 Cf., S. Arzubialde, S. J., *Ejercicios Espirituales de S. Ignacio. Historia y Análisis*, Manresa, 2009, p. 433.
- 27 Cf., J. Melloni, S. J., *The Exercises of St Ignatius Loyola in The Western Tradition*, trans. M. Ivens, S. J., Gracewing Publishing, 2000, pp. 15-19.
- 28 Cf., op. cit., Meloni, p. 17.
- 29 『靈操』100番.
- 30 トマス・ア・ケンピス『キリストにならう』F・バルバロ訳, ドン・ボスコ社,

2003年, 21-22頁.

31 L・コニエ, 前掲, 19頁参照.

32 J・ルクレール/F・ヴァンダンブルーク『キリスト教神秘思想史 中世の靈性』第2巻, 上智大学中世思想研究所監訳, 1997年, 平凡社, 788頁参照.

33 鈴木宣明, 『中世ドイツ神秘靈性』, 南窓社, 1991年, 231-232頁参照.

34 同上, 207-208頁参照.

35 同上, 205-206頁参照.

36 同上, 205頁参照.

37 Cf., op. cit., J. Melloni, S. J. p. 18.

38 Cf., Ibid.

39 Cf., M. Viller., ed, *Dictionnaire de spiritualité ascétique et mystique : doctrine et histoire*, Tome 3, Paris, 1937, pp. 1222-1291. また, 新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』研究社, 2009年, 1387-1388頁参照.

40 Cf., Ludolphus de Saxonia, *Vita Jesu Christi e quatuor Evangelis et scriptoribus orthodoxis concinnata*, A. C. Bolard., ed., Paris-Bruxelles, 1878, pp. 266-269.

41 この点に関しては, 前掲, 拙稿「イグナチオ・デ・ロヨラの神化思想」480-482頁参照.

42 田辺, 前掲, 68頁参照.

43 『靈操』313番.

44 Cf., J. J. Toner, S. J., *A Commentary on Saint Ignatius' Rules for the Discernment of Spirits*, St. Louis, 1982, p. 3-5. また前掲, 拙稿「イグナチオ・デ・ロヨラの神化思想」480-482頁参照.

45 『靈操』316番.

46 『靈操』317番.

47 『靈操』1番参照.

48 『自叙伝』8番参照.

49 同上参照.

50 『自叙伝』8番.

51 田辺, 前掲, 67-70頁参照.

- 52 『自叙伝』10 番.
- 53 R・バルト『サド、フリーエ、ロヨラ』篠田浩一郎訳、1975 年、みすず書房、93 頁参照.
- 54 『自叙伝』14 番.
- 55 『自叙伝』19 番
- 56 『自叙伝』28 番.
- 57 Cf., Covarrubias Orozco, *Tesoro de la lengua castellana o española*, Madrid, 1873, p. 240. *Tesoro de la lengua castellana* には、「知性 entendimiento」は「魂の能力のひとつ。知性は望みが実際に求めるものを明らかにするものである」とある.
- 58 『靈操』50 番.
- 59 『靈操』180 番.
- 60 『自叙伝』28 番.
- 61 『自叙伝』29 番.
- 62 川中仁「『マンレサ』（一五二二-二三）：イグナチオ・デ・ロヨラの生涯における三一的キリスト中心的コミュニケーション(1)」『人間学紀要』上智人間学会編、2006 年、179-181 頁参照.
- 63 Cf., H. Rahner, S. J., *Ignatius the Theologian*, trans M. Barry., Ignatius Press, 1990, pp3-10. この表現に関しては H・ラーナーは、聖書との関連性を指摘し、イグナチオの思想における重要な表現の一つとして指摘している.
- 64 『自叙伝』29 番.
- 65 川中、前掲「マンレサ」、184 頁参照.
- 66 『自叙伝』30 番
- 67 川中、前掲「マンレサ」187-188 参照.
- 68 田辺、前掲、218 頁参照。また川中、前掲「マンレサ」、189 頁参照.
- 69 『自叙伝』30 番.
- 70 川中、前掲「マンレサ」188 頁参照.
- 71 『自叙伝』31 番.
- 72 川中、前掲「マンレサ」、189 頁参照.